

飴だま

新美南吉

青空文庫

春のあたたかい日のこと、わたし舟ふねにふたりの小さな子どもをつれた女の旅たびびと人がのりました。

舟ふねが出ようとすると、

「おおい、ちよつとまってくれ。」

と、どての向こうから手をふりながら、さむらいがひとり走つてきて、舟にとびこみました。

舟ふねは出ました。

さむらいは舟のまん中にどっかりすわっていました。ぽかぽかあたたかいので、そのうちにいねむりをはじめました。

黒いひげをはやして、つよそうなさむらいが、こつくりこつく

りするので、子どもたちはおかしくて、ふふふと笑わらいました。

お母さんは口に指をあてて、

「だまつておいで。」

といいました。さむらいがおこつてはたいへんだからです。

子どもたちはだまりました。

しばらくするとひとりの子どもが、

「かあちゃん、飴あめだまちょうだい。」

と手をさしだしました。

すると、もうひとりの子どもも、

「かあちゃん、あたしにも。」

といいました。

お母さんはふところから、紙のふくろをとりだしました。ところが、飴あめだまはもう一つしかありませんでした。

「あたしにちょうだい。」

「あたしにちょうだい。」

ふたりの子どもは、りようほうからせがみました。飴あめだまは一つしかないので、お母さんはこまってしまいました。

「いい子たちだから待っておいで、向こうへついたら買ってあげるからね。」

といつてきかせても、子どもたちは、ちょうだいよオ、ちょうだいよオ、とだだをこねました。

いねむりをしていたはずのさむらいは、ぱっちり眼めをあけて、

子どもたちがせがむのをみていました。

お母さんはおどろきました。いねむりをじやまされたので、このおさむらいはおこっているのにちがいない、と思いました。

「おとなしくしておいで。」

と、お母さんは子どもたちをなだめました。

けれど子どもたちはききませんでした。

するとさむらいが、すらりと刀かたなをぬいて、お母さんと子どもたちのまえにやってきました。

お母さんはまっさおになって、子どもたちをかばいました。いねむりのじやまをした子どもたちを、さむらいがきりころすと思っただのです。

「飴^{あめ}だまを出せ。」

とさむらいはいいました。

お母さんはおそるおそる飴^{あめ}だまをさしだしました。

さむらいはそれを舟^{ふね}のへりにのせ、刀でぱちんと二つにわりました。

そして、

「そおれ。」

とふたりの子どもにわけてやりました。

それから、またもとのところにかえつて、こつくりこつくりねむりはじめました。

青空文庫情報

底本：「ごんぎつね 新美南吉童話作品集」てのり文庫、大日本図書

1988（昭和63）年7月8日第1刷発行

底本の親本：「校定 新美南吉全集」大日本図書

入力：めいこ

校正：鈴木厚司、もりみつじゅんじ

2003年9月29日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www>

W.aozora.gr.jp/) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランテイアの皆さんです。

飴だま

新美南吉

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>